

## The Whitsun Weddingsに秘められた 詩人の愛の真実

高野正夫

(1)

愛に対して強い失望感を抱いていたラーキンにとって、ある特定の文学は、必ずしも若き日の彼の心に、真の安らぎをもたらすものではなかったようである。愛に対して深い挫折感を覚えたときと同じような落胆の気持ちは、自分自身や社会に対する諷刺詩である 'A Study of Reading Habits' に描かれた、ある特定の文学に対する幻滅感にも共通するものであった。

When getting my nose in a book  
Cured most things short of school,  
It was worth ruining my eyes  
To know I could still keep cool,  
And deal out the old right hook  
To dirty dogs twice my size.

学校では習わなかった沢山のことを書物によって得た青年期の主人公が、成長し大人になるにつれて、ヒロイズムの文学から離れていき、苛酷な現実に向を向けていく過程が描かれている。父の書斎や図書館でD. H. LawrenceやAldous Huxleyなど多くの現代作家の作品を読みふけたラーキンの少年時代から青年期にかけての自らの体験を告白したものであり、また、青年期の若者によくありがちな現実逃避的な読書に対する強い欲求を示した作品である。

「落ち着いている」(‘keep cool’) や「ひれつな奴」(‘dirty dogs’) という、子供じみたフィクションに見られる常套語句をしきりに使いたがる、<sup>(1)</sup>読書好きな少年は、ある特定の文学によって自分自身の空想の世界にひたっていく。そこには現実の世界では叶わぬことも可能となるまったく自由な世界が展開される。自らがヒーローとなり、「自分の二倍もあるひれつな奴に／例の右フックを食らわせる」(‘And deal out the old right hook／To dirty dogs twice my size.’) こともできるのである。さらには、少年の空想はその度合いを増して大人っぽい行動にも、自らの強い欲望のはけ口を求めていく。

Later, with inch-thick specs,  
 Evil was just my lark :  
 Me and my cloak and fangs  
 Had ripping times in the dark.  
 The women I clubbed with sex !  
 I broke them up like meringues.

青年期の若者が、女性関係に対する欲求不満を、ある特定の文学（例えば ‘pornography’）によって解消しようとするのはまったく自然なことである。しかし、想像の世界とはいえ、このようないささか粗野な言葉—「僕は女どもをこん棒でやっつけた／メレンゲのように潰した」(‘The women I clubbed with sex ! / I broke them up like meringues.’)—によって、若者の複雑な感情を赤裸々に表現しようとする詩人の姿勢は、多少不適切な印象を与えるかも知れないが、これも、この時期の若者の心に潜む衝動的で、不安定な欲望の表出なのであろうか。いずれにしても、ラーキン自身は詩作においては常に一定の距離を置いて冷静に対象を観察する傾向のあった詩人であったからこそ、直接的な強い表現で女性への特別な感情を露にする仕草を目の当たりにすると、奇異な感じはぬぐえない。しかし、このような青年期の若者が使いがちな ‘sex’ に関する常套語句は、彼らにだけ限定されたものではなく、成長した詩人ラーキンにとっても決して関わりのないものではなかった。それというのも、ラーキン自身が生涯ポルノ雑誌に対して異常な興味を抱き、図書館の自分の事務室の棚にその多くを並べていたという事実が指摘されるからである。

しかしながら、このような言葉以上に異なった意味合いで主人公の強い気持ちを表しているのが、最終連の書物に対する粗野な言葉である。

Don't read much now : the dude  
 Who lets the girl down before  
 The hero arrives, the chap  
 Who's yellow and keeps the store,  
 Seem far too familiar. Get stewed :  
 Books are a load of crap.

‘A Study of Reading Habits’ を有名にしたといわれる「本はたわごとの山盛りさ」（‘Books are a load of crap.’）という最終行は、書物（といってもそれは特定のヒロイズム文学やポルノ文学を言っているのであろう）に対するラーキンの痛烈な、そして正直な気持ちを述べたものであろう。本を扱うことを仕事とした詩人が、書物すべてをがらくた扱いするというのはまったく考えられないことであろう。しかし、常にありのままの真実を追い求めた詩人から見れば、書物に描かれた人間の世界は、時には無意味な、時には偽りの、そして時には空しい非現実的なものに見えたのであろう。青年期の自分が抱いていたある特定の文学に対する本能的な好奇心と、成長した自分が示す冷静な判断力との明白な違いを強調しながら、自らの人間としての精神的な成長過程を分かりやすく述べている。

「女を失望させるキザな奴」（‘the dude/Who lets the girl down’）や、「臆病な店の主人」（‘the chap/who's yellow and keeps the store,’）などの言葉にほのめかされた、あまりにもありふれた登場人物にはもううんざりしたとでもいう主人公の気持ちは、さらに最終行の「本はたわごとの山盛りさ」といういささか粗野な言葉遣いによって強められている。ある意味では、このような「きたない言葉」は、主人公の、社会やしきたりに対する一種の反抗の意志表示であると同時に、青年期の若者に特有の書物による現実逃避の後には、必ず、厳しい現実が待ち構えていることを認識させるものなのであろう。成長して現実の世界で幾多の挫折や失敗を経験した主人公にとって、ある特定の書物やポルノグラフィはもはや自分に慰めや夢を与えくれるものではなく、<sup>②</sup>自らの無能さや平凡さを投影し実感させるものに過ぎないのである。

書物と現実の二つの世界を往き来しているうちに、人は時としてそのいずれかに幻滅を覚えるものであるが、最後の一行は、まさにそのような気分になったときの人間の複雑な感情を表現した言葉であろう。言い換えれば、人は書物に描かれた、現実では実現不可能な野望や夢の世界に慰めを見いだそうとするが、結局それは幻想なのだと気づくとき、愛の幻想におけるときと同じように、ある種の文学にも失望するのである。表向きは文学における俗物趣味を風刺しながら、詩人ラーキンの痛烈な批判は、人生と文学を混同しがちな自らの自己満足的な想像力にも向けられているのかもしれない。

## (2)

このように愛に挫折し、時にはある種の書物にも失望したラーキンは、実際の人生においては、結婚というきわめて常識的な形をとらずに、ルース、ミーヴ、モニカなど特定の女性との交際を続けながら、生涯を終えたわけであるが、自らの結婚観や人生観のようなものを、この詩集では、主に‘Self’s the Man’ と ‘Dockery and Son’ という作品で明確に述べている。

‘A Study of Reading Habits’ と同様、諷刺詩である ‘Self’s the Man’ は、独身と思われる語り手と妻帯者であるArnoldという、二人の異なった人間の生き方を、語り手である主人公がきわめて冷めた嘲笑的な眼で捉えた作品である。まず最初にアーノルドと主人公の二人に対する世間の評価が明らかにされている。

Oh, no one can deny  
That Arnold is less selfish than I.  
He married a woman to stop her getting away  
Now she’s there all day.

「そう 誰もが認めることだが／アーノルドは僕ほどわがままじゃない」(‘Oh, no one can deny / That Arnold is less selfish than I.’) という、主人公のアーノルドをいくぶん持ち上げるような言い方は、世間のアーノルドに対する見方をそのまま正直に表現したものである。結婚して妻と子供に囲まれて平凡な生活を送るアーノルドと、ラーキン自身とも思われる独身の主人公を、「わがまま」(‘selfishness’) の度合いではかってみれば、結婚

して家庭を持ち、世間一般の社会的責任と義務を負っているアーノルドは、主人公よりもはるかに一人前の男として認められている。片や、結婚もしないで青春をずるずると引きずりながら、未だに誰もがうらやむ独身生活の自由を満喫している主人公は、まったく社会的責任や義務も果たさずにただ自分ひとりのために生きている「わがままな」男と責められてもしかたがない。詩のタイトルからも明白なように、そして女性から見ればなおさらそうであろうが、男はわがままな存在であり、特に独身男性は、家庭や子供という現実的な束縛がないため、アーノルドのような既婚の男性以上にわがままな、未熟な存在に見えるのである。

しかし、冒頭のアーノルドに対する世間一般の寛大な見方を横目にしながら、主人公は、直ちに反撃を開始する。「逃げられないように女と結婚したが／今では彼女が一日中側にいる」(‘He married a woman to stop her getting away/Now she’s there all day.’) という、皮肉な言葉は、まさに独身者である主人公から見た、アーノルドの結婚生活の現実的な側面を表現したものである。結婚を受け入れることによって、自由を失ってしまった男に対する痛烈な皮肉となっている。さらに、主人公のきわめて嘲笑的な観察には、Swarbrickの言うような、「自分が実際に意志の弱い、根性のない奴だと見なしている男に対する敵意や軽蔑」<sup>(3)</sup> さえ感じられる。

アーノルドとして登場するこの男は、実際にはラーキンの同僚として Brynmor Jones Libraryに働いていた Arthur Woodであった。同じ図書館に勤めていた詩人の Douglas Dunは、上司であった Woodを自らの詩においても描写しているが、彼は、「読書好きな、太った、気の良い、かつては海軍にいたことのあるグラスゴー出身の男で、ロックスバラ・クラブの復刻版や、極小の活字印刷物や、本の装丁、そして、彼が小説のように読んでいた古書の書店のカタログなどの鑑定家であった。」<sup>(4)</sup> 同じスコットランド生まれのダンから見れば、ウッドは、小柄で極めて気さくな男のようであった。しかし、ラーキンにとっては、どういうわけか彼は、目ざわりな、不愉快な人物であったようである。母親 Eva への手紙においても、たびたびウッドのことについて書いているが、そのどれもが、彼の小心さや愚かさを嘲るものであり、1969年3月23日の手紙では、「ウッド氏が一週間風邪で休んでいました。彼は老け込んだと人は言っていますが、僕にとって相変わらず彼は、14年間もの間僕を悩ましてきた、にやにや笑う低能の小鬼です。」<sup>(5)</sup> と、痛烈に同僚のウッドをこき下ろしている。現実の職場でラーキンがウッドに対

して抱いていた嫌悪感が、‘Self’s the Man’においても、そのままアーサーに対する主人公の「敵意や軽蔑」となって表現されてしまったわけであるが、このような個人的な感情は、妻帯者であるアーノルドに対する主人公の多少屈折した、自己正当化的な感情へと発展していくのである。

詩の前半に描かれたアーノルドの日常は、わがままで世間知らずな主人公とは対照的に、きわめて‘selfless’なものであり、常に家庭を大事にし、子供や妻そして時には義理の母など、家族のために自分を犠牲にした生き方となっている。5連にも強調されているように、アーノルドという典型的な家族第一主義的な男性と主人公を比較すれば、誰の目からも明らかなように、アーノルドの方が男としては評価できる存在である。

To compare his life and mine  
 Makes me feel a swine :  
 Oh, no one can deny  
 That Arnold is less selfish than I.

彼と僕の人生を比べると  
 僕はいやな気分になっちまう  
 そう 誰もが認めることだが  
 アーノルドは僕ほどわがままじゃない

冒頭の二行を再び繰り返しながら、アーノルドの模範的な夫や父親ぶりを素直に認めているようにみえるが、実際には、妻や子供のいない主人公がアーノルドに対して抱くある種の劣等感、自己正当化的な優越感の裏返しへと変化していく。それというのも、後半になると、主人公に内在するもう一人の自己がいつものように登場して、次のように反論を開始するからである。

But wait, not so fast:  
 Is there such a contrast?  
 He was out for his own ends  
 Not just pleasing his friends;  
  
 And if it was such a mistake

He still did it for his own sake,  
 Playing his own game.  
 So he and I are the same,

Only I'm a better hand  
 At knowing what I can stand  
 Without them sending a van—  
 Or I suppose I can.

6連目にある、「彼は自分のために一生懸命やったので／ただ友人を喜ばせるためではない」(‘He was out for his own ends／Not just pleasing his friends ;’)という言葉からは、自分と彼との間には皆が言うほどたいした違いはないのだという、主人公の率直な気持ちがかがえる。つまり、アーノルドという男の存在をさらに深く観察すると、まったくわがままな面を押し殺して、家庭や家族のために生きているように見えるが、もとを正せば、彼もすべて自分自身のためにやっているだけに過ぎないのである。そう考えると、妻帯者のアーノルドも、独身の主人公もまったく「同じ穴のムジナ」ということになる。ここまでくると、結局、人間は誰でも立場は違い、自分自身のために生きているのだという結論に達しても良さそうな成り行きではある。

結婚していないがために「わがままだ」という烙印を押され、責められることに反発する主人公の哀れな自己正当化は、虚しい強がりにも見えてしまいそうであるが、最終連において、主人公はためらいがちに、独身者である自分の方が、妻帯者であるアーノルドよりも物事についての判断力があつたからそうなたただけのことと、人生の大きなテーマの一つである結婚という問題をあっさり受け流している。「ただ僕の方が病院に送られないうちに／我慢できるものを見分けるのが／うまいだけのこと」(‘Only I’m a better hand／At knowing what I can stand／Without them sending a van—’)という理由づけは、多少奇異な印象は拭えず、ただ自らの優越性のみを強調しているだけに過ぎないように見えるが、いずれにしても主人公にとって、アーノルドが送るような平凡で平和な結婚生活は耐え難いものようである。

妻や子供たちに囲まれながら、平凡ではあるが幸せな毎日の生活に埋没し

ていくアーノルドという一人の男を風刺的に描きながら、ラーキンが主人公に、自分から見れば惨めと思われる結婚生活の一面を確認させている。そして、*The Whitsun Weddings*の特徴の一つであるユーモアは、‘Self’s the Man’の主人公の風刺描写やこっけいな反論にも表れている。このユーモアが主人公の結婚に対する痛烈な非難や風刺をいくぶん和らげているのであろう。ある意味では、主人公である語り手を通して、ラーキン自身が結婚に対する自らの否定的な気持ちを宣言しているようにみえるが、彼は必ずしも結婚を全面的に否定し、その制度を軽蔑しているわけでもない。

結婚に関して言えば、ラーキンには常に‘misogamy’という呼び方が付きまとっていた。そして、ラーキン自身が‘misogyny’ではないかと思われるほど、彼の描く女性は力強く男まさりの感じがある、アーノルドはまさに妻の尻にしかかれ、自由を奪われ、思い通りにあしらわれている。そして、そのような束縛から逃れるために主人公はわがままを通してしているのである。男子校のグラマースクール、KHS時代の親友であったJim Suttonに、1948年8月11日の手紙で、「避難場所として以外、結婚には魅かれない」とか、1949年の日記帳にも「結婚はむかつく制度だ」と記し、また、晩年の1979年には、「結婚は完全に自然に反している。なぜなら、男は多くの女性を欲せずにはいられないからであり、また、女はいずれにしても26歳で魅力がなくなるからだ」<sup>(6)</sup>と書いていた。

このように確かに、ラーキンは、結婚に対しては若い頃から消極的な考えを持っていた。ラーキン自身が、アーノルドのように家庭的な夫や父親にならずに、生涯独身のままであったのも、結婚に対してある種の不安を抱いていたからであろう。ルースとの婚約を解消したときにもラーキンが認識したように、結婚することによって自らの自由を失うことが、詩人としての自己にいかにか大きな影響を与えるかを恐れていたのである。つまり、この詩においても主人公が、家庭人であるアーノルドと自分との間に明確な区別をつけていたように、ラーキンにとって、詩人としての生活と結婚生活は、見事に両立するものではなかったであろう。

しかしながら、詩の最終行でラーキンは例のごとく、主人公に、果たして自分がアーノルドに対して抱く優越感が揺るぎない確固たるものであるのか、ということに関して一抹の不安を感じさせている。「それともできると思っているだけか」(‘Or I suppose I can.’)という、主人公の最後にふともらした言葉が、それまでの彼の優越感を完全に逆転させてしまったようで



ある。結婚によって失うものばかりに目がいついていたため、その良さに気がつかなかった主人公であるが、ひとたび結婚によって得るものを考え直してみると、独身者である自分の立場が本当に幸せなものなのかどうか不安になってしまうのであろう。

つまり、アーノルドのように夫や父親となって、自由はないが、平和な家庭生活を送る平凡な喜びを放棄してしまった自分自身に対して、一種の虚しさのようなものを感じるのである。最初は、アーノルドも自分も結局は同じ穴のムジナと言っておきながら、最後には、自分の方がわがままではないのかという猜疑心に苛まれてしまう。このように、独身であることによって失うものを思い出し、夫や父親にならないことによってもたらされる深い幸福の喪失感に気がつくとき、主人公は、自分が本当に幸せなのかどうか思い悩むのである。そして、わがままという利己主義と、自分を捨てて初めて生まれる家庭的な愛のはざまに立ちつくす、主人公の何げない言葉に見られる優柔不断さこそ、常に人生の選択に思い悩むラーキンの真実の姿であったのだらう。

### (3)

主人公の空しい自己正当化をコミカルに描くことによって、結婚生活に対する二律背反的な自らの気持ちを表現したラーキンは、さらに、彼の代表作の一つである‘Dockery and Son’においても、若くして結婚して息子を持った、大学時代の同級生ドッカーリーと、自らの独身者としての生き方の違いについて言及している。ラーキンの最も重要な詩の一つである‘Dockery and Son’は、1962年3月8日に亡くなったハル大学の図書館員であり、彼の前任者であったAgnes Cumingの葬式からの帰途、自らの母校であるOxfordのSt. John’sに立ち寄った際のことを一年ほど後に思い出しながら、翌年の3月28日に完成した作品である。

この詩全体を覆いつくしている陰鬱な空気は、恐らく知人の葬式に出席したときの重苦しい雰囲気、そのままラーキンの心に残っていたことに帰因するものであろう。自らの大学時代の懐かしい出来事、自らの人生の大部分を支配した否定的な人生観である運命論、そして、自らの人格形成に与えた両親の影響<sup>7)</sup>などについて触れているということを考えると、‘Dockery and Son’は‘Church Going’や‘The Whitsun Weddings’と同様、

きわめて「個人的な」自叙伝的な詩とみなすことができる。

母校のコレッジを再訪したときに、Deanから自分の昔の級友であるドッカーリーの息子が同じコレッジに在学していると聞いて、驚いた話し手である主人公が、自分とドッカーリーとの生き方の違いに改めて自らの人生を見つめ直す内容となっているが、この詩には、もう一つ大きな主題が含まれている。それは、ラーキンの心の中でたえず議論されてきた結婚によって生ずる問題、つまり、子供についての問題である。結婚することによって失うと考えていた、時間的、空間的な自由にも増して、彼が大切にしていたのは精神の自由であった。結婚の延長線上に子供の存在を常に意識していたラーキンにとって、それは、結婚以上に自らの詩人としての存在に強い影響を及ぼすと考えていたのであろう。

主人公が5連目で、「なぜ彼は加えることが増えることだと思ったのだろう／僕には薄めることなのに」(‘Why did he think adding meant increase? / To me it was dilution.’)と、多少自己弁護的な言い方で、子供が自分にとっては、自分の一部を削り取るような存在であることを強調している。実際に、ラーキンが子供嫌いであったという事実は、話し手である主人公の特異な子供に対する見方を裏づけるものであろう。それ故、4連目で、「息子も妻も家も土地もないということは／未だまったく自然なことに思われた」(‘To have no son, no wife, / No house or land still seemed quite natural’)という、きわめて冷めた見方が可能となる。

このようなラーキン自身の分身とも言える主人公の現在の状況に対する諦観は、ある意味では、わずか19歳で自分の息子をもうけ、自分の望みを果たしたドッカーリーに対する開き直りのようにみえる。それというのも、1977年10月24日の、ある読者への返事の手紙において、ラーキンは、詩の最も重要な結論である最終連に触れて、「この一節全体に述べられているのは、生まれつき異なった人生観を抱いていたために、ドッカーリーには息子がもたらされ、私には何ももたらされなかったということであり、また、ドッカーリーの息子が明らかに彼を気にかけるのと同じ形で、私を気にかけてくれるものは何もないということなのです。」<sup>⑧</sup>と、息子を持つことのなかった自分の人生をいくぶん淋しげに振り返っているからである。‘Self’s the Man’の主人公と同じように、結婚して息子を持つことのなかった男の悲しい喪失感が、ラーキンの言葉から感じとれる。

しかしながら、このような自己憐憫的な言葉や、主人公の執着心のない生

き方に対する自己弁護的な表現も、ラーキンが、家庭とか家など世間一般の形式的なしがらみにとらわれない考え方の持ち主であったならば、きわめて当然なことと言える。そして、実際の人生において、精神的にもまた物質的にもいわゆる自分の財産と呼べるようなものは、自らの作品や自由な生き方以外には持とうとしなかった人間であったならば、彼の言葉はさらに現実味を帯びてくるであろう。子供を含めた家庭生活の出発点となる結婚という問題に対して、因習的でロマンチックな幻想を抱くことのなかったラーキンと同様、話し手である主人公は、人生にあまりにも多くの夢を求めない、所有欲を捨てきった生き方こそ、自分にとっては最もふさわしいものと見ているのであろう。

さらに、主人公の自由な生き方の拠り所となっているのは、詩の結論として述べられた、有名な最後の4行の言葉に表現された運命論的な人生観なのである。

Life is first boredom, then fear.  
 Whether or not we use it, it goes,  
 And leaves what something hidden from us chose,  
 And age, and then the only end of age.

ドッカーリーと自らの生き方を比較することによって、本質的には両者の間には違いがないのだという考えを持った主人公にとって、人間の生き方は、「生来の考え」(‘Innate assumptions’) 或いは、「習慣」(‘habit’) のいずれかによって決定されるのである。そして、どちらの生き方を選んだとしても、それは人間として生きるという意味からすれば、きわめて自然なことである。それというのも、主人公にとっては、ドッカーリーのように若くして息子と持とうと、あるいは、妻や子も家も土地も持たない、世間から見れば、無責任な落伍者のような生き方をしようとも、最後には、同じ「年齢の唯一の終わり」(‘the only end of age.’) が、人生の地平線の彼方で待っているからなのである。

たとえどのように生きてとしても、人間は死ぬ運命にあるのだからどのような生き方をしても同じなのだという、詩人の人生観は、きわめて否定的で短絡的なもので、いささか偏った見方であると非難されるかもしれない。しかし、人間の人生は、「退屈」(‘boredom’) から「恐怖」(‘fear’) へ、そ

して「年齢」(‘age’)を経て、最後には死に向かうのだという、決して誰もが逃れることのできない不可避の運命は、人間自らが選択するものではなく、常に死を貪る「時間」によって決定されるものだと詩人は考えている。Sonnetsに描かれた詩人がパトロンである若者に、結婚して子供を生み、時の暴虐から逃れるようにすすめたのとはまったく対照的に、‘Dockery and Son’の詩人は、荒れ狂う時に対抗する一つ的手段ともいえる結婚を初めから放棄している。それというのも、たとえどのような生き方をしても、人間は最後には年をとり、運命の導くままに死を迎えるのだというきわめて否定的な、しかし自然な考え方が、彼の人生を覆いつくしていたためなのであろう。

ラーキンの詩における二つの最も大きな主題である、愛と死は、多くの場合、二つの対立するイメージとなって具体的に表現されるわけであるが、*The Whitsun Weddings*においても同様に、愛と死という二つの主題が、お互いに攻めぎ合っている。そして、‘Dockery and Son’の結末に不気味に浮かびあがる、人間にとって不可避の死のすがたは、詩集の至る所に顔をのぞかせている。‘Nothing To Be Said’においても、「生命はゆるやかに滅びるもの」(‘Life is slow dying’)と、非情な死の現実がうたわれているが、ラーキンにとって、人間の生命はきわめて残酷なものであり、まったくいかなる慰めももたらすことのない死の影に覆われている。

ラーキンには、‘I Remember, I Remember’, ‘Here’, ‘The Whitsun Weddings’など、列車の旅をうたった詩、(‘train poems’)が多くあるが、‘Dockery and Son’に描かれた詩人の人生の列車の旅は、列車の旅に対して抱く一般的なロマンチックなイメージからはほど遠く、すでに最終の到着地が定められていて、その定められた孤独な軌道を詩人はただ進んでいくだけである。人間の生き方や人生でさえもあらかじめ決められているのだという、暗く重い運命論に縛られていた詩人にとっては、常識的なドッカーリのような家庭人としての人生が唯一の選択の道ではなかったのである。いささか偏った、救い難いほど悲観的な人生観と見なそうと、また、なるほどと受け入れようとも、それは読者の自由であるが、いずれにしても、語り手の主人公と同じように、人間も最後には結局死ぬことになるのであるから、自分の自由に好きなように生きるのが最も幸福なのだという気持ちを持って、ラーキン自身も人生を生きていたのであろうか。

## (4)

このような否定的な人生観を抱いていたラーキンは常に自らの死の瞬間を恐れていた。この世のいかなるものも、彼の心に重くのしかかる不安をいやしてくれることはなかった。人を最も幸せな気持ちにしてくれる愛でさえも、死の暗い影を払いのけ、明るい幸福の光で詩人の心をやさしく包むことはなかった。ラーキンの死に対する一種の強迫観念のようなものについて、モーシオンは『ラーキン伝』の中で次のように述べている。

In his lifetime it was generally thought that the focus of his interest was death, and that what bound his poems together were themes of mortality. Reading his poems in chronological sequence, it's clear that his obsession with death is inextricable from his fascination with love and marriage. Even in 1959, when the emotional claims being made on him were comparatively few, feelings of guilt and anxiety about his relationships with women continued to gnaw at him.<sup>(9)</sup>

モニカとの愛の情景を描いた、‘Talking in Bed’においても明確にされたように、同じ愛のベッドに横たわる恋人たちでさえ、真実の愛の言葉を交わすことが出来ないのであり、ラーキンにとっては、女性との愛の交わりや係わり、そして結婚に関しても、死に対する強い偏執的な不安が障害となって、幸福へと通じる愛の扉を閉ざしていたのである。この詩集においても、愛をうたったほとんどの詩が愛の幻想を書き記している。‘Faith Healing’では、信仰治療による歪んだ愛のかたちが暗示され、‘Love Songs in Age’では、未亡人の失われた愛の幻影はいかなる慰めももたらさず、また、‘Wild Oats’では、あまりにも利己主義的な性格ゆえに、愛をはぐくむことのできない主人公が優柔不断に語りかけている。そして ‘The Large Cool Store’では、不自然な愛の幻想が、人間の物質的な欲望を通して描かれている。

‘The Large Cool Store’は、ハルの旧市街の中心に位置する百貨店、マークス・アンド・スペンサーを訪れた後に書かれた作品である。人々の昼

間の現実の生活と、彼らの夜の生活に多少彩りを与えてくれる、下着売り場に漂う幻想的な愛との間に横たわる不思議な感覚の違いが、きわめて生々しく映し出されている。

衣料品を中心に、さまざまな人間の物質的な欲望を満たす品物を売っている百貨店に陳列されている紳士用の衣料品を見れば、「男たちの平日の世界が思い出される」(‘Conjures the weekday world of those’)と、まず詩人は述べている。毎日決まった時間に、工場や仕事場、現場にと、朝早く出かけて行く男たちの平日の暮らしぶりは、きわめて規則的で質素なものである。そして、このような平凡な男たちの習慣や現実は、大型店舗である百貨店に売られている男物の品物にも共通する性質であると、さらに付け加えている。

ところが、これとは対照的に、ワイシャツやズボンの隣にある女性用の「流行の夜着売り場」(‘the stands of Modes for Night :’)に来ると、売り場の風景はまったく一変してしまう。色とりどりのさまざまな女性用の夜着が、ダイヤモンドのような光を放ちながら、華やかに、そして艶やかに陳列されている。このようなきわめて釣り合いのとれない二つの異質な売り場の風景から、詩人は、男性と女性がそれぞれ抱く夫婦生活についての思いの不思議な相違を、つい連想してしまう。紳士物の地味な衣料品と、女性用の夜着の華やかさに同居している現実の男と女の家庭生活は、詩人にとっては何とも奇妙なものに映るのである。そして、最後には、「女性と愛」に内在すると自ら思っている、男には理解しがたい不可思議なその本質について告白している。

To suppose

They share that world, to think their sort is  
Matched by something in it, shows

How separate and unearthly love is,  
Or women are, or what they do,  
Or in our young unreal wishes  
Seem to be : synthetic, new,  
And natureless in ecstasies.

流行の夜着とあの暮らしぶりが  
 ともに関わっていると連想すれば この種の衣類が  
 あの暮らしの何かと似合うと考えれば

愛 女 あるいは女のすることは  
 ばらばらで現実離れもはなはだしい  
 それとも若い空想的な願望から見れば  
 こんなものなのか 恍惚は  
 合成の 新品で あじけのないもの

ラーキンの独特な愛や女性についての考え方が率直に述べられている。多少偏った見方とも思われるが、この時のラーキンにとって、女性や愛などの世界に漂う怪しい雰囲気は、まったく「この世のものとは思われない」(‘unearthly’) ほど強い印象を与えたのであろう。現実の男と女の生活においても、愛は、幸せな夢のように空想的でロマンチックなものではなく、まさに「流行の夜着」に象徴されるように、きわめて人工的な合成品であることを冷ややかに認識している。そして、人々の愛に満足感を与えてくれる合成的な虚構の品物は、永続的なものではなく、詩のタイトルの「冷房完備の大きな店」が暗示しているように、主人公の抱く幻想的な愛の恍惚さえも冷たくひやしてしまうものなのであろう。

ラーキンの詩においては、主人公の幻滅感の原因は、往々にして、現実と空想との間に横たわる大きな落差を認識することにあると思われるが、この詩においても、理想的な愛のかたちは実現されず、いつものように失望と幻滅が愛の行く手に待ちかまえている。詩人は、冷房完備の百貨店が演出する合成的で真実味のない「空想の世界」(‘fantasy-world’) に引き込まれていく、人々の空しい愛の願望を描き、冷静に観察してはいるが、彼自身も、決して彼らの幻滅感を風刺的に眺めているのではない。自分も彼らと同じ悲哀と失望を味わう運命にあることを素直に受け入れている。

ラーキンが*The Whitsun Weddings*の中で描いた、複雑に絡み合った人間の愛の諸相を見るとき、愛がいかに関わり手にとって大切な要素であったかが分かる。そして、ラーキンという一人の人間に限らず、すべての人間にとって愛は不可欠の感情である。愛のない人生は、不毛の砂漠の

ようなもので、いつかは人の心を涸らしてしまふ。人間は、人を愛し、人に愛されることによって、真の人生を享受することができる。それは、時には、人々の手の届かない実現しがたい理想となって、人々を苦しめる。真実の愛、完全な愛など、この世には存在しないとあきらめている人々にとって、それは、明日になればいやされる心の渇きかもしれないが、真実の愛に幸せを追い求めようとする人々には、決して安らぎをもたらすことはない。それというのも、愛には、この世の多くの真実と同じように、二つの相反する性質が内包されているからである。

*The Whitsun Weddings*の4年ほど前に書かれた‘Love’という詩においても、ラーキンが明確にしているように、愛には常に二面性が付きまとう。それは、「私の人生は私のためにある。」（‘My life is for me.’）という言葉に代表される、‘selfish’な一面と、「あなたのためにだけある存在」（‘an existence/Just for your own sake.’）という言葉に示される、‘unselfish’な、まったく正反対の側面なのである。人を愛すると同時に、人に愛されるということは決して不可能なことではない。しかし、ラーキンにとって、人間は、必ずしも自分自身への愛を投げ捨てて、他人のためにすべてを犠牲にすることはできないのである。まるで人間の存在そのものと同じように、矛盾した性質を固有する愛に立ち向かうとき、人は、その二律背反的な価値に戸惑うのである。愛とは、本質的には、他人を思いやり、気遣うことを根底としている。しかし、利己的な愛は、愛の真の意味からすれば、愛とは呼べない矛盾した性質のものであるかもしれないが、それも愛の一つの相なのであり、決して否定することはできない。

ラーキンは、このような愛の二面性については、他の多くの詩においてもしばしば言及している。ジャズのサクソホン奏者に捧げた‘For Sidney Bechet’では、愛は「巨大なイエス」（‘an enormous yes’）と温かく迎えられる。そして、恋人の一人であったミーヴの誕生日に贈った聖書の中に、彼は、「愛は忍耐強く、愛は親切で、誰をも嫉妬しない」（“Love is patient, love is kind and envies no one”）<sup>(10)</sup>とも記している。しかし、愛の‘unselfish’な、肯定的な側面に言及する一方で、ラーキンは、‘Love Again’では、愛を「下痢」のような症状として捉え、苦しみをもたらすものとして否定的に見ている。このように、愛に内在するまったく正反対の側面を考察しながら、彼は、現実の愛と、理想の愛との相克に詩人としての観察の眼を向けていた。



しかしながら、実際にラーキンが描く愛のすがたは、ほとんどが失敗に終わるものであり、この詩集にうたわれた多くの愛の詩においても、愛の否定的な側面が強調されている。それは恐らく、彼が、理想の愛に少しでも近づきたいと願う一方で、現実の愛にあまりにも多くのものを期待したがために得た、当然の結果なのであるかもしれない。結局、愛は、ラーキンが思うほど多くの喜びをもたらすことはなかったのである。そして、このような否定的な愛についての考え方の背後に横たわるのが、この世のすべてのものには、死の最後の時が運命づけられているという、彼自身の救い難いほど悲観的な人生観なのであろう。

[注]

使用textは、Philip Larkin, *The Whitsun Weddings* (faber and faber, 1988) に拠った。

- (1) Andrew Swarbrick, *Master Guides The Whitsun Weddings and The Less Deceived By Philip Larkin* (Macmillan, 1986) p.18.
- (2) Andrew Motion, *Philip Larkin : A Writer's Life* (Faber, 1993) p.299.
- (3) Swarbrick, *op. cit.*, p.20.
- (4) Douglas Dunn, 'Memoirs of the Brynmor Jones Library', *Larkin at Sixty* ed. Anthony Thwaite (faber and faber, 1982) p.57.
- (5) Motion, *Philip Larkin : A Writer's Life*, p.255.
- (6) Philip Larkin, *Required Writing* (faber and faber, 1989) p.260.
- (7) Motion, *Philip Larkin : A Writer's Life*, p.334.
- (8) Ibid.
- (9) Ibid., p.291.
- (10) Ibid., p.307.